

創価大学生とエチオピア学生の環境教育の実態、及び、環境配慮の意識と行動の格差に関する研究

Research on the actual state of environmental education of Soka University students and Ethiopian students, and the disparity in awareness and behavior of environmental consideration

グループ名：Plane3T テーマ 4：

創価大学 経済学部経済学科 古賀誠人 佐藤広宣 深沢智恵

創価大学 法学部法律学科 廣瀬幸輝 猪俣友莉菜

創価大学 文学部人間学科 北堀夏菜子

1. 序論

環境配慮に高い意識を持つ人が、実際に環境配慮行動をするとは限らない。これは、数多くの環境教育に関する研究で立証されている。それらの先行研究では、「意識と行動の格差」に焦点を当て、格差の原因を探る研究や、行動までの心理プロセスを導き出した研究が多い。下の図は土井(2011)が、これまでの意識と行動の格差に関する研究をまとめたものである。

2. 材料と方法

分析では、創価大学生とエチオピア学生を対象に Google のアンケート機能を使い、データを集計する。回答は創価大学生 300 件、エチオピア学生 50 件を目標とする。

アンケート内容と心理プロセスについては、小池・吉谷・白川(2003)が行った研究を参考に、知識、関心、動機、行動意図のステップに分けた質問(図 1)と過去に受けた環境教育を答えてもらう質問をする。

表1 環境教育に関する意識と行動に関する研究

1. 対象者	2. 意識と行動の不一致	3-1 情報	3-2 教育	3-3 (1) 時期	3-3 (2) 性別と発達段階
小学生	清水 (1978)	3-1 情報	3-2 教育	3-3 (1) 時期	3-3 (2) 性別と発達段階
中学生	西川・斎野 (1998)	3-1 情報	3-2 教育	3-3 (1) 時期	3-3 (2) 性別と発達段階
高校生	山田・須藤 (1996)	3-1 情報	3-2 教育	3-3 (1) 時期	3-3 (2) 性別と発達段階
大学生	高橋 (2001)	3-1 情報	3-2 教育	3-3 (1) 時期	3-3 (2) 性別と発達段階
教員	山田・山本 (2001)	3-1 情報	3-2 教育	3-3 (1) 時期	3-3 (2) 性別と発達段階
成人 (保護者)	井村ら (1993)	3-1 情報	3-2 教育	3-3 (1) 時期	3-3 (2) 性別と発達段階
成人 (一般)	井村ら (1993)	3-1 情報	3-2 教育	3-3 (1) 時期	3-3 (2) 性別と発達段階
登山者	井村ら (1993)	3-1 情報	3-2 教育	3-3 (1) 時期	3-3 (2) 性別と発達段階

	質問事項
知識	地球温暖化/森林破壊/汚染物質の越境/生態系の破壊/四日市公害/長良川河口堰/諏訪湖の埋め立て
関心	地球温暖化/森林破壊/生態系の保護/水辺環境の保全/ゴミの減量/省エネルギー/長良川河口堰/都市部でのカラスの異常繁殖
動機	地球温暖化の抑制/森林保護/希少生物種の保護/家庭外の居住地域の環境保護/ゴミの減量/家庭内の省エネ
行動意図	値段が高くても再生紙を利用する/衝動買いは我慢して本当に必要なものだけを買う/多少暑くても冷房の使用を我慢する/自家用車の使用を控え、自転車や電車を利用する/多少不便でもノートの残りや紙の裏を利用する/歯磨きのとき水を流しっぱなしにしない

図 1

その後得られた回答を心理プロセスにあてはめ、創価大学生、エチオピア学生の意識と行動の格差を明らかにする。(図 2)

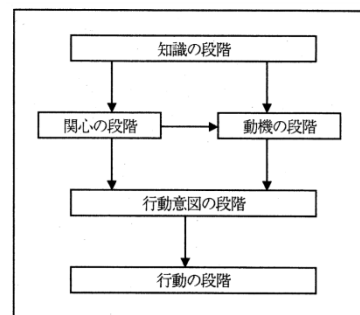


図 2

しかし、それらの先行研究から得られた結果や心理モデルを、実際の教育現場にあてはめて分析する研究はまだない。そこで、本研究では、先行研究から明らかになった結果や心理プロセスをあてはめ、創価大学生とエチオピア学生の「環境教育」と「環境配慮の意識と行動の格差」の実態を分析する。そこから得られた結果をもとに、さらなる環境配慮行動促すために必要な教育や施策を提案する。

最後に、最も低い結果になったパスに注目し、広瀬モ

デルをあてはめた小池モデルで、分析を行う。(図3)

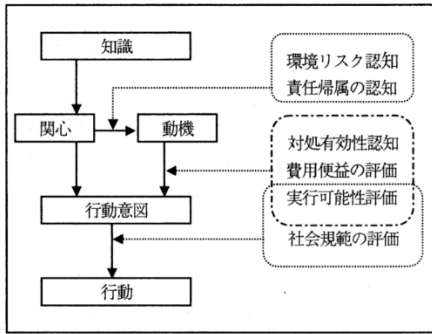


図3

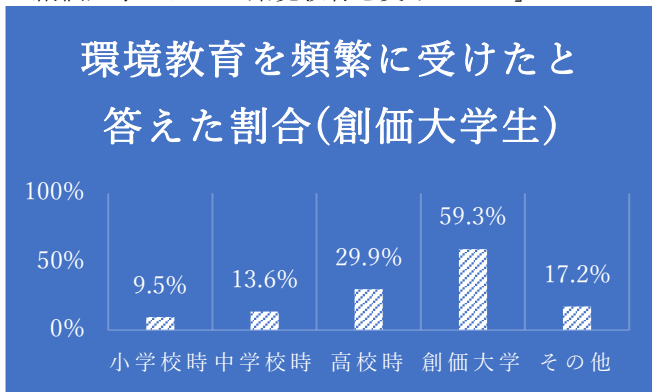
3. 結果と考察

ここでは、特に重要な「創価大学、エチオピアで行われている環境教育の実態」と「意識と行動の格差の実態」が明らかになった結果を紹介する。

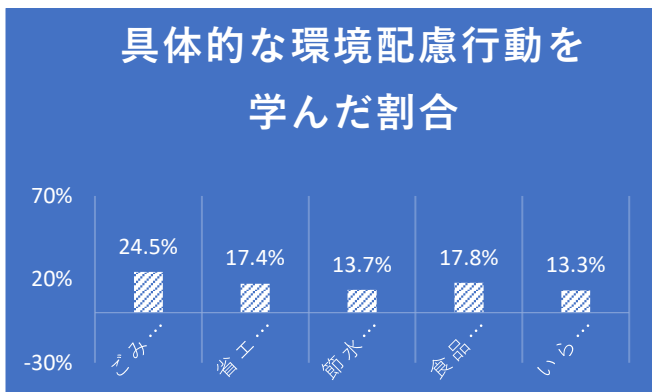
創価大学生の結果

結果1

「創価大学生はいつ環境教育を受けたか？」



創価大学生は、大学時に最も環境教育を受けていることが分かった。また学位上がるにつれて環境教育を頻繁に受けた学生が増えていることも見てとれる。



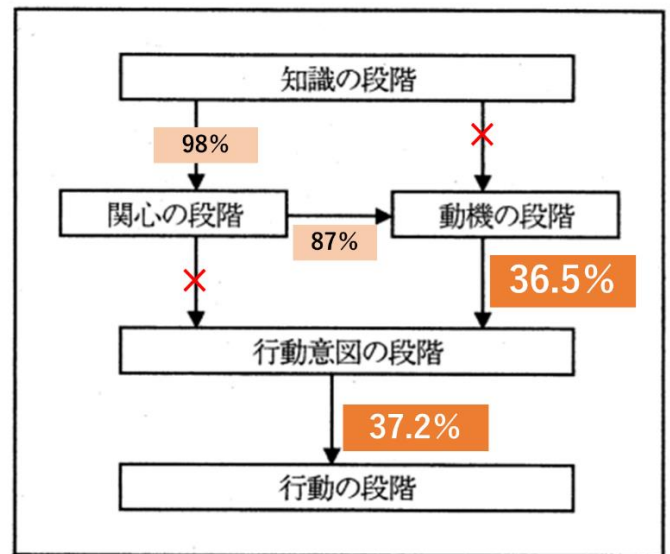
ところが、知識的な教育はされているものの、具体的な行動を知る機会は少ないことが分かった。榎本(1994)は

意識と行動の乖離について分析をし、「具体的な対象方法に関する知識の普及の遅れが環境を配慮した行動の普及を妨げている大きな要因である」と述べているが、その通りの結果が得られた。

結果2

「創価大学生の環境配慮に対する意識と行動の格差の実態」

図は SDG s における知識と行動の格差



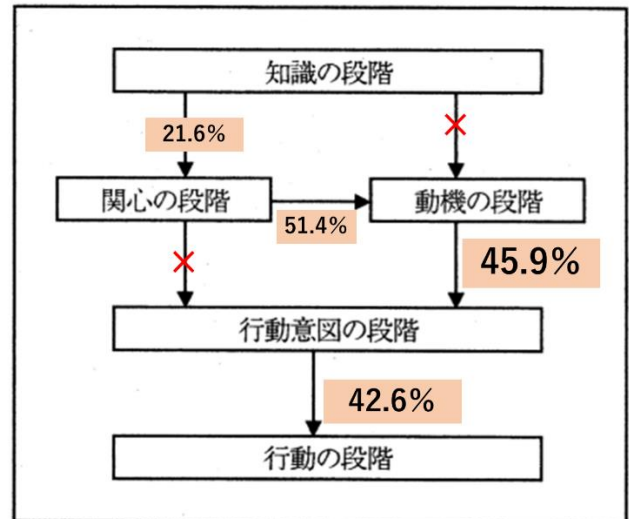
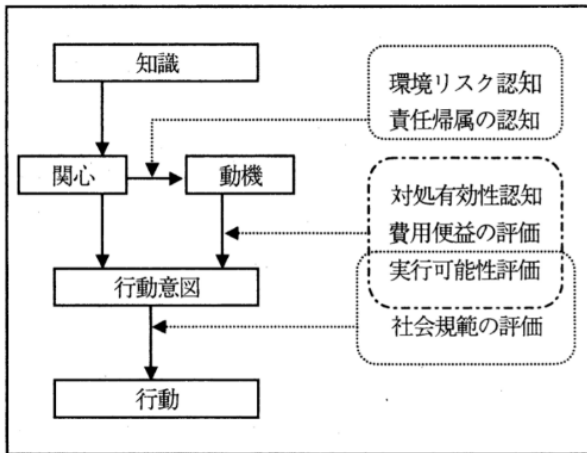
環境問題や SDG s に対する、知識と関心は高い割合であったが、動機、行動意図におけるパスでは、低い割合であることが明らかになった。これは環境問題や SDG s の知識や関心を高める教育は盛んにされているが、実際の行動につながるような、動機、行動意図に関する教育に課題があるということである。

※赤いXのあるパスは相関が弱いことを表している(先行研究より)。つまり心理プロセスは知識→関心→ドゥー気→行動意図→行動の流れになっている。

考察

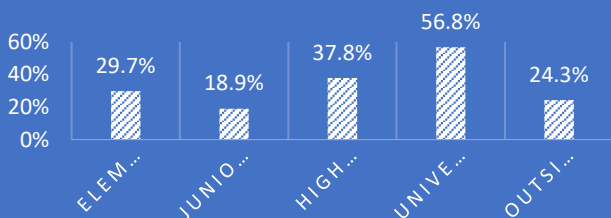
結果からは、「動機から行動意図につながるパス」「行動意図から行動につながるパス」この二つに課題があることが分かった。その結果を廣瀬モデルで分析すると、①対処有効性認知②費用便益の評価③実行可能性評価④社会規範の評価に関する教育が必要であることが分かった。

廣瀬モデルをあてはめた小池モデル

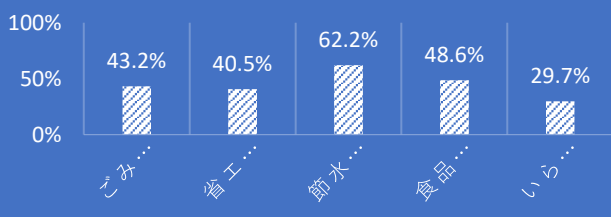


エチオピア学生の結果

環境教育を頻繁に受けたと答えたETIOPIA学生の…



具体的な環境配慮行動を学んだエチオピア学生…



エチオピアでは、具体的な行動に関する教育を受けた学生の割合がかなり高かった。心理プロセスでも、意識と行動の乖離はなく、知識がない割合が多くても、関心が強く、さらに行動をしている学生の割合が高いことが分かった。

4. 結論

創価大学においては、環境問題の知識(環境リスクの認知や責任帰属の認知)に関する教育が盛んにおこなわれていることが分かった。一方で具体的な行動を知る機会については依然として少ないことが分かった。

エチオピア学生においては、意識と行動の乖離はあまりなく、環境配慮行動をよくしていることが分かった。SDGsに関して知識を有する割合が低かったため、知識面(環境リスクの認知や責任帰属の認知)の教育が必要であることが分かった。

環境問題のため、実際に行動する学生が増加するために、これからの、創価大学で行われる環境教育は、知識面だけではなく、具体的な行動を考えるような教育や取り組みが必要である。エチオピア学生には、環境問題のリスクなどの知識面でのさらなる教育が必要である。

参考文献

記載例：
小池・吉谷・白川(2003)「環境問題に対する心理プロセスと行動に関する基礎的考察」
https://www.jstage.jst.go.jp/article/prohe1990/47/0/47_0_361/pdf/

[-char/en](#)

「我が国の環境教育における意識と行動に関する既存研究の系譜」土井美枝子(2011)

https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/3/31614/20141016182031407895/HUMR_11_9_9.pdf

山田一裕・須藤隆一(1996)「大学生の環境問題に対する意識と環境にやさしい行動」『環境教育』6(1)pp49-56

https://www.jsfee.jp/EnvEdu/6_1_49.pdf

榎本博明(1994年)「環境情報としての実践的対処知識の重要性について」『環境教育』3(2)pp62-67

諏訪博彦・山本仁志・岡田勇・太田敏澄(2006)「社会学ジレンマに基づく環境教育プログラムの提案(費用負担意思)

」 https://www.jstage.jst.go.jp/article/jasi/21/0/21_0_46/pdf

.